

編集後記

(55巻 第11号 2009年11月)

やっと日本でも手術ロボットが本格的に導入されるようだ。噂によると、近日中に医薬品医療機器総合機構(PMDA)の認可がおりるといふ。世界のロボット手術の状況を見ると遅すぎる動きではあるが、これで公にロボット手術が出来る環境が整うことになる。

日本でこれだけ手術ロボットの導入が遅れた理由は、ロボット自体が承認されなかったり、また混合診療を認めない日本独自の医療保険など制度的問題が大きいと思われるが、それだけでは無いように思う。体腔鏡下手術が導入された時には大きなコンセプトの変化が必要であったが、ロボットの導入は単に体腔鏡下手術の延長に過ぎない。日本の外科医は先達の匠の技にあこがれて研鑽を積んできた。またサイエンスの素養の高い指導者達は、コンセプトの変化の無いロボット導入にあまり魅力を感じなかった。このような背景もロボット手術の導入が遅れた理由であると考えられる。

ただ、後発のメリットもある。現在のロボットはプロトタイプよりかなり改良されており、われわれはいきなり改良版を使用できる。体腔鏡下手術の技術力を考えると、日本のロボット手術のレベルは一気にトップレベルに達することが予想される。問題はこれからである。端的にいうと「それでどうした?」「これからどうする?」ということである。ロボットの改良はこれからも続くであろう。ただ、それに乗っかっているだけではおもしろくないのである。

(小川 修)